

議論を始める手続きに関する考察

—インフォーマルな話し合いの開始部に着目して—

馮 佳誉(関西学院大学大学院生)

1. はじめに

話し合いは、人々が様々な課題を解決するための手法として、様々な場面に取り入れられているが、どのような話し合いでも、開始部、メインな議論部分、終了部という三つの部分から成り立つということが共通している。だが、各部分において話がどのように進められ、また各部分の間がどのように繋がられているのかは、話し合いの目的や形式 (formality) によって異なっている (Boden, 1994; Schwartzman, 1989 など)。

それに関して、従来の研究の多くは、会議などの情報指向 (information oriented) のフォーマルな話し合いに焦点を当て、参加者がどのように日常会話から話し合いに移行し、話し合いの本題に入るか、またどのように話し合いから日常会話に戻るのかという、開始部と終了部における活動の移行の特徴を中心に分析してきた (Boden, 1994; Nielsen, 2013)。その結果、進行役がきわだった音調で「オーケー」のような境界づけマーカー (boundary mark) を産出することによって日常会話から話し合いへの移行を行い、その後、事前に定められたアジェンダに沿って、ターンの割り当てや議題の議論の順番、議論の進め方をコントロールしながら、話し合いを展開させたり収束させたりするといったように、進行役が話し合いの展開を全般的にコントロールするという特徴が明らかにされている。

他方、打ち合わせなどのタスクや意思決定指向 (task and decision oriented) のインフォーマルな話し合いは、正式な進行役がおらず、事前に定められた手順通りに議論を進めなければならないという制約もないため、話し合いの各部分の区切りがはっきりせず、話し合いの展開に関するマネージメントが参加者一人一人に委ねられるダイナミックなものであると指摘されている (Murata 2011: 99)。こうした話し合いにおいては、参加者の協働によって話し合いの展開の仕方が決められていくと考えられるが、では参加者がどのように話し合いを協働的に作り上げていくのかという実態を明らかにする研究はまだ少ない。

そこで、本研究では、このようなインフォーマルな話し合いに焦点を当て、こうした話し合いを構築する際に見られる参加者の協働の仕組みを明らかにすることを目的とする。この目的の達成に向けて、今回の発表では、まず、話し合いの最初の段階である「開始部」に着目する。話し合い活動が開始された後に、参加者が活動のメインである議論部分へと話し合いを展開する上でどのような相互行為上の問題に直面し、またどのような手続きを用いてそれらの問題を解決して議論を始めるのかを、会話分析の手法を用いて考察する。

2. データ

本研究に使用したデータは、某大学の大学院で日本語教育を専門とする大学院生向けの教育実習に関する授業で行われている話し合いの録画データである。その授業の受講生は、「日本語が中級レベルの交換留学生に対して4回分の日本語授業を行う」という実習に向けて、4回分の日本語授業の授業デザインを決めるために話し合いを行う。話し合いが授業時間中に行われるものであるため、教師と受講生の間での、話し合いのゴールの確認や進行役と書記の担当の相談などのやりとりと、資料配分などの事務的なことは話し合いを開始する前に済まされるが、話し合いがどのように進めていくのかについては、教師が関与せず、全て受講生に任されている。

また、今回の発表で取り上げる二つの断片は、両方とも4回分の日本語授業の共通のコンセプトと各回のサブコンセプトを決めるために行われた話し合いの録画データである。それぞれの話し合いの前に、参加者が各自で4回分の日本語授業のコンセプトに関する提案を考えて、配布資料にまとめて話し合いの場に持ってきていた。話し合いはそれぞれの参加者が持ってきた資料に基づいて展開したものである。

3. 分析

分析の結果、話し合い活動が開始された後、参加者はどのようにメインの議論部分を始めきっかけを作り出すかという問題に直面していることが明らかになった。そして、その問題を解決するために、参加者が酒記布資料を利用し、そこから議論を開始するきっかけになりうるリソースを取り上げて共有するという手続きを行うことがわかった。この手続きには、「議論の進め方を提示する」タイプと「議論の材料になりうる論点を共有する」タイプの二種類がある。

以下では、「議論の進め方を提示する」タイプと「議論材料になりうる論点を共有する」タイプという議論を始めのために用いられる二種類の手続き（断片中「→」の部分）の事例を挙げながら、それぞれの手続きを使うことによって、参加者がどのように協働的に議論を始めののかを検討する（断片中、参加者が自発的に提案に言及する部分は「⇒」で示されている）。

3.1 議論の進め方を提示するタイプ

断片1の直前までは、4人の参加者が事前に各自で考えてきた4回分の日本語授業のコンセプトに関する提案の資料をお互いに配布し、その後、その教室に蚊が多いことについて雑談していた。07行目でNが「さて」という境界づけマーカを発話の冒頭に置くことで、これまでの雑談とは別の活動に移ることへの志向を示している。その後、「やりましょうか」と、今から話し合いを始めことを参加者全員に呼びかけ、09-14行目で他の参加者もそれに応じている。そうすることによって、参加者が雑談から話し合い活動に移行した。

その後、15, 19, 21, 24行目で、Nがまず、参加者各自で考えてきた案を一つずつ見ていくという議論の進め方を提案している。21行目で「じゃあ」が冒頭に置かれることによって、開始された話し合いを次のステップに進めることを志向している。続いて、「1人ずつ」と「全員が順番に」というやり方を提示し、24行目で「とりあえず見ていきますかね」と付け加えることで、「各自で考えてきた案を1人ずつ見ていく」という現時点での議論の進め方に関する方法を、「かね」と相手の反応を求める形で提案している。このように議論の進め方を提案することによって、「どのように進めるか」という議論の手順の角度から、議論を始めきっかけを作り出している。

Nによる議論に関する進め方の提案に対し、25行目でMは同意を示すものの、それ以上の行為は遂行しない。他の参加者も何の反応を示さず、26行目で0.5秒の沈黙が生じる。すると、27, 29行目でNが「なんか、じゃ僕から」とターンをとって、自らが提案した進め方に沿って自分の提案を述べ始めることを申し出る。他の参加者が受諾（30行目）や依頼（31行目）など前向きな反応でNの申し出を積極的に受け入れると、Nは自分の提案を他の参加者に紹介し、自分の提案を一つの論点として参加者に共有している（33行目-128行目）。128行目で、Nが「はい、以上です」と自分の案を述べ終わったことを示し、132行目で自分の案に対する他の参加者の意見を求めると、他の参加者が意見を述べ始める。この時点で議論が始まったことが見て取れる。

この事例では、Nがまず雑談から話し合い活動への移行(07行目)を行い、その後、議論の進め方を他の参加者に提示して

[断片1 20190930_opening]

- 01 N: 噛まれてたん>だよ、なんか、<°
 02 M: たぶん、[かも、噛まれてると思う[よ、私も噛まれてる。hh。
 03 N: [ね。 [ann。
 04 S: 私も。
 05 M: あらあらあらあら。
 06 (0.7)
 07 N: さて、やりましょ[↑う(.)か。
 08 M: [あ-、
 09 M: はい。
 10 S: (じゃないと)
 11 N: ね..
 12 M: もっと喋りたいところだけど、
 13 N: そうそう。
 14 M: はい.he[hehe。
 15 → N: [とりあえず、ちよっと、
 16 M: はい。
 17 (0.8)
 18 M: °ちよっと::、°
 19 → N: °まあ-°
 20 (0.5)
 21 → N: じゃ、まあ、1人ずつ::、((視線→M))
 22 (0.5)
 23 M: °あ-.<°[()
 24 → N: [°とりあえず<見ていきます::す°かね°.=
 25 M: =(承知)Ye:::s::.
 26 (0.5)
 27 ⇒ N: °>なんか、<°
 28 (0.3)
 29 ⇒ N: jya-、じゃあ、僕から:hhhh。
 30 Y: はい。
 31 M: お願いしま::す。
 32 (1.3)
 33 ⇒ N: °>とりあえず、<°ちよっと、あの::結構、あの::、フォーラムとか
 34 ⇒ で準備とかで、全然時間が取れなくて::、=
 35 M: =おつかれ[さまでした。
 36 Y: [(いえいえ.)
 37 ⇒ N: [°すいませんけど、<あの::、ちよっと:
 38 ⇒ N: 適当にやってしまう部分がありますが、
 39 Y: うん。=
 40 ⇒ N: はい..hh ちよっと、え::、
 41 (1.3)((N 視線→M))
 42 M: はい。
 43 (0.3)
 44 ⇒ N: あの:: (0.6) hhm. コンセプトなんか、(0.2) 適当になんですけ
 45 ⇒ ど::、(0.3) 関西ってなんなん::? ¥みたいな、¥[hehe やつで::、=
 46 Y: [en。
 47 ⇒ N: =>まあ、<かんさい:::を:>なんか<°メインとする:::みたいな
 48 ⇒ 話を、(0.4) したので:::まあ、とりあえず::、(.) いろんなことがあ
 49 ⇒ るのか:::な:::っていうことで、4つ考えてみました::。
 ((70 行省略: N が考えてきた四つのサブコンセプトを一つずつ紹介している))
 120 ⇒ N: で:ええと、サブコンセプト4なんですけど、(どさり)一言関西弁
 121 ⇒ °>なんぐ° ですけど::、
 ((7 行省略: N が四つ目のサブコンセプトを紹介している))
 128 ⇒ N: ええと、さん-、え:4を考えました。はい、[以上です。
 129 全員 [(nodding)]
 130 (1.0)
 131 Y: なるほど。((nodding))
 132 N: なんか意見[とか、あれば::、(0.5) お願いします。
 133 M: [(なんか、)
 134 Y: huh。
 135 (2.8)
 136 M: 関東というのは予想外で、これはいいと思います。=
 137 N: [うん。(nodding)
 138 Y: =[うんうんうん。
 139 M: [うんうんうん。比較するのとディスカッションがいいと
 140 思います。

いる(15, 19, 21, 24行目)。Nのこのやり方は、従来の研究で明らかにされてきた進行役が手順をコントロールする際の発話の特徴と似ているため、このようなやり方をとることで、Nは進行役の役割を果たしているということが言える。他方、Nの発話の組み立て方を見ると、いずれも指示ではなく、提案の形をとって他の参加者の意見を求めている。また、Nは議論の進め方を提案することで議論開始のきっかけを作ったが、次話者を選択するような発話はしていない。このような振る舞いから、進行役の役割を果たしつつも、話し合いを全般的にコントロールするのではなく、参加者に自由に話してもらうというNの志向が見られる。こうした志向には、参加者の間に明確な制度的権限の違いがなく、全員が平等に参加する権利を持ち、自主的に話し合いに参加するという、この話し合いのインフォーマルな性格が表れていると言える。さらに、こうした性格上、議論のきっかけを作り出すそのような発話がなされても、その後誰がターンを取るのか、また、それらのきっかけをどのように利用して議論を始めていくのかについては、全て参加者自身の選択に任されている。したがって、議論を始めるためには、Nが自ら提案を行ったように、参加者が積極的に参加する姿勢が求められていると言える。

3.2 議論材料になりうる論点を共有するタイプ

この節では、議論を始めるために用いられるもう一つの手続きである「議論材料になりうる論点を共有する」タイプの事例を検討していく。以下では、まずこのタイプの手続きの特徴を明らかにし、それを踏まえた上で、参加者がどのようにその手続きを利用して協働的に議論を始めるのかを分析する。

断片2の直前までは、参加者が考えてきた提案の資料を配布したり、配布資料がなかった人(T)が自分の案をホワイトボードに書いたりしていた。その作業が終わり、01行目で教師TNが話し合い活動を開始する指示を出す。その後、参加者が資料を整理しながら資料に対する自分の気付きを述べ始めている。ここで注目したいのは24行目からのUやKの発話である(断片中「→」がついている箇所)

24行目で、Uは資料を見ながら「面白かったのは」という肯定的な評価をまず述べ、この後に来るものが自分が肯定しているものであることを予示している。その後、HとCの名前に言及しつつ、「テレビ番組」という資料内容の抜粋を付け加えることで、HとCの提案内容の「テレビ番組」というアイデアがUにとって評価されるものであるという意見を他の参加者に提示している。

この断片において、24, 25, 26行目のUの発話のように、参加者が「提案者の名前」、「資料内容の抜粋」、「評価」という三つの内容に言及しながら、数多くの資料から自分が取り上げたい論点とそれに関する評価を提示する発話が多く見られた(例えば、31, 34行目Kの発話)。この組み立て方は、聞き手に多くの配布資料からその論点を特定させることと、論点についての意見を述べること、という二つのことを同時に遂行するための方法であると考えられる。このようなやり方によって、「何について議論するか」という議論内容の角度から、議論を始め

[断片2 20181001_opening]

01 TN: はい。(0.3)では。
 (12行省略:参加者が資料を見ている))
 14 Y: he[hehe. (>っていうか<)>サブコンセプトは似てる:=
 15 H: [he[hehh.
 16 ?: [hhhh.
 17 Y: =(やつ多いな)
 18 (1.0)
 19 U: うん::[:
 20 Y: アニメとか、
 21 (1.3)
 22 Y: うん::[:>そういうのも、°
 23 C: 目標を(数えてる[)
 24 → U: [面白かった°>のは<°
 25 → HさんとCさんが: °>なんか<°似ていた°>やつ.<°なんか:
 26 → テレビ番組([)<°なっている
 27 K: [Cさんですね.テレビ番組.
 28 (0.7)
 29 → C: °い:や::,>これは,<(これはふつう):
 30 → hh.(なんか,)かもしれない.°=
 31 → K: =CさんとYさんの,あれ,面白かった.
 32 (0.8) ((皆さんが手元の資料を見ている))
 33 ?: aun::[:
 34 → K: [漫画家°とか,°
 35 (4.1) ((U→ホワイトボード その他→資料))
 36 → U: Tさんは:>かなり<YOU-,YOUになっちゃっ°>てる.<°=
 37 H: [¥YOU.¥
 38 → U: [hh.YOUのことにしちゃってるし:(.)な::hh
 39 (0.3)
 40 Y: hehehe[heheh.
 41 → T: [あ::,°=
 42 → T: =>なんか<-,ちよつと,<(0.4)恋愛とか,悩m-,えつ,そういu°?
 43 H: えつ,日本人[と恋したことが[ある.((視線→ホワイトボード))
 44 U: [え,これTさん? ((視線→ホワイトボード))
 45 T: [そう(わた si./でsu.)=
 46 U: =Tさんだよ. ((視線→ホワイトボード))
 47 (2.3)
 48 H: hehe.恋したことがあるの?
 49 (0.7)
 50 Y: 恋したことがあるの°?°.
 51 T: 日本人[と恋したこと()
 52 U: [恋した.
 53 ALL: あん::[:
 54 U: [お↑::↓::[:
 55 → T: [いや,私実際,この:::ビデオ,あの:,
 56 → 番組見て:,なんかその:
 57 K: コーナ[.
 58 → T: [コーナーある(らしいで[:].
 59 K: [ehehehe.
 60 → T: 直接[引用(° °)
 61 ?: [ahunn::[:
 62 (23.0) ((皆さんが手元の資料を見ている))
 63 → U: とりあえず見た感じ:>みんなそんなに<変わってない,
 64 → 感じがあります.
 65 (0.9)
 66 → U: °>iya-<°,ちよつとHさんが>ちよつと<けこう:
 67 → 膨らんだっていう感じがしますけど:.
 68 (0.9)
 69 → H: ま:::,そうすね.=
 70 → U: =ものがたり:(0.2)昔話だった°(り),>なんか<°アニメ漫画.
 71 → H: そう.ま,[ほぼ:ま,せんしゅう:=
 72 → U: [°()膨らんでる.°
 73 → H: =皆さんが:言ったこと[を:,ある程度,
 74 Y: [うん[:.
 75 U: [うん:::
 76 (0.4)
 77 → H: ま,部分的に:,ま,整理しました.
 78 Y/?: うん:::
 79 (0.3)
 80 → H: で:,ま::,まずは:,>その:<°,
 81 (1.0)
 82 → H: 日本のアニメと漫画,
 83 (1.0)
 84 → H: [を:,一つ[の]トピックとして:,
 85 U: [°umn.°
 86 (0.8)
 87 → H: あ:自分が好きな作品について話したり:,
 88 U: うん:::=
 89 → H: =やっぱり漫画とか,アニメとかの,(0.2)一つ,>まあ<ま-
 90 (1.2)
 91 → H: 特徴としてはやっぱりオノマトペ

1 断片2の26行目「テレビ番組」,34行目の「漫画家」は配布資料に書かれた内容と思われる。また、Tがホワイトボードに書いた提案内容(コンセプトとサブコンセプト)は、全て「Youは.....」という形式になっていて、その一つは「Youは日本人と恋したことがある?」という内容になっている。

また、このような発話は、肯定的な意見に限らず、36, 37 行目の U の発話のように、否定的な意見として理解されるものもある。36 行目で、U はホワイトボードに書かれた案を見て、T が考えてきた 4 つの「You は……」系のサブコンセプトについて、T の名前に言及しながら「かなり You になっちゃっている」と、T の 4 つのサブコンセプトの共通点である「You」の使い方が相当程度以上に達していることを否定的なニュアンスで指摘している。続く 38 行目で、U はホワイトボードを見ながら自分が気付いた特徴を「You のこと」でもう一回明示的に述べ直している。ここで、U の発話の組み立て方も肯定的な意見の時と同じく、「提案者の名前」(T さん)、「資料内容の抜粋」(You)、「評価」(かなり You になっちゃっている)という三つ部分が含まれている。

しかし、こうした発話で議論を始めるきっかけを作り出されるだけではまだ不十分である。次に参加者が直面する問題は、そのきっかけをどのように利用し議論を始めるのかである。24, 25, 26 行目の U の H と C の提案に関する評価がなされた後、言及された 1 人である C が、29 行目でターンをとって、「いや」と U の評価を否定して、「これは普通」という自己評価を行い、U の評価を受け入れないことを示している。また、36, 38 行目の T の提案についての否定的な評価の後、提案者である T が 41 行目から、提案の中に出てきた「恋愛、悩み」などのキーワードについて述べ始めようとしている。その後、T は 55-60 行目で、自分の案が実際のテレビ番組を参考にしたものであることを表明し、参加者の否定的なニュアンスに対して、自分の案の正当性を主張している。こうした振る舞いの分析を通して、誰かが配布資料から議論の材料になりうる論点を取り上げて自分の評価と共に共有した後に、「〇〇さんの(名前)……」という発話で言及された人が、自己選択でその評価について何らかの反応をすることで議論を始めることがわかった。だが、C と T のように、評価に対する抵抗を示す場合があれば、断片 2 のその後の展開が示すように、その論点に関する議論が深まらずさらなる展開ができない可能性もあると考えられる。

T が自分の提案の正当性を述べて U の否定的評価への抵抗を示した後、議論が展開せずにしばらく停滞していた(60-62 行目)。63, 64 行目で、U は全ての資料に目を通した後、「みんなそんなに変わっていない」と述べ、全員の提案が共通しているという感想を表明する。その後、66 行目で、「いや」と言って、自分が今述べた感想を否定し、他の参加者の提案と比較する角度から H の提案を、以前より膨らんだと評価している。この評価を、69 行目で H は言い淀みつつ受け止めているが、U はさらに、膨らんだと言える根拠として H の提案の中のキーワードを提示している。このように段階的に産出された U の肯定的評価に対して、明示的な受け入れや否定の産出を避けるために、H が 71 行目から自分の資料内容の詳細を紹介し始めた。その後、H が紹介した提案について、他の参加者が自分の意見を述べることで、議論が展開していく。

この事例では、参加者が一人一人配布資料から議論材料になりうる論点を提示して共有するという仕方を用いているが、この仕方は、「共有されたものから考える」という議論の進め方も同時に含意していると考えられる。さらに、出された内容に関わる参加者が自主的かつ積極的にその内容に応じて提案を詳しく紹介することが、議論が深めていくことによって不可欠であることがこの事例分析を通して示されている。

4. おわりに

本研究では、インフォーマルな話し合いにおいて、参加者がどのように議論を始めるのかを分析してきた。その結果、参加者が配布資料を利用し、そこから議論の進め方と論点という、議論を始めるきっかけになりうるものを共有する手続きが明らかになった。それぞれの手続きから、議論を始めるために、議論の方向性と論点をまず決めるという参加者の協働が見られた。また、いずれの事例も、誰かが発言すべきなのかということに干渉せず、参加者が自主的に話し合いに参加するという参加者の志向に、自由で平等に話し合いに参加するというインフォーマルな話し合いの特徴が示されている。従って、話し合いがフォーマルかインフォーマルかは、参加者のふるまいを通して観察可能になるものであると言える。

参考文献

- Boden, D. (1994). *The business of talk. Organizations in action*. Cambridge, UK: Polity.
 Murata, K. (2011). *Relational Practice in Meeting Discourse in New Zealand and Japan: A Cross-Cultural Study*.
 PhD Thesis, Victoria University of Wellington, New Zealand.
 Nielsen, Mie F. (2013). "Stepping Stones" in Opening and Closing Department Meetings. *Journal of Business Communication* 50(1): 34- 67.
 Schwartzman, H. B. (1989). *The meeting: Gatherings in organizations and communities*. New York: Plenum.

92 (0.6)
 93 H: [↑は:一つの特徴(として),
 94 U: [うんうんうん.
 95 Y: [うん::
 96 H: まあ,非常に:(.)なんというか,
 97 日本らしい:ものなので:
 ((5 行省略:H が考えてきた「アニメ漫画の世界」というサブコンセプトを紹介している))
 103 H: あの日本のアニメ::漫画のせ-界へという:(0.3)サブコンte-セプト
 104 の内容として,
 105 (1.6)
 106 H: [今考えています.'
 107 U: [うん::
 108 Y: [うん::
 109 U: 'なるほど.'
 ((5 行省略:H が考えてきた「アニメ漫画の世界」というサブコンセプトを紹介している))
 103 H: あの日本のアニメ::漫画のせ-界へという:(0.3)サブコンte-セプト
 104 の内容として,
 105 (1.6)
 106 H: [今考えています.'
 107 U: [うん::
 108 Y: [うん::
 109 U: 'なるほど.'
 110 H: 'はい.'
 111 U: 'オノマトベといのは' <私は面白いなあ:>' と思う' <この四人は
 112 オノマトベの研究()です!ね.